
禿 鷹

BRUCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禿鷹

【著者名】

BRUCE

【あらすじ】

此の世の芥や探しものを捜る。禿鷹の様に狙った獲物を逃さない！始末屋鷹村仁が大阪を舞台に活躍する！

始末屋の鷹（前書き）

「 捜せないものは、俺には無い！」

始末屋の鷹

Prologue

—

大阪の北区から中央区一帯は昼間は、オフィス街として人並みが多い場所だが、夜の午後十時を廻ると人並みも疎らに成り、閑散として静寂な場所に様変わりし、女性の一人歩きは極めて、危険窮まりないものだ。

美紗樹は、道修町一丁目の東亜信託銀行大阪支店勤務する一年目の行員だ。今夜は、決算月で残業の帰り道を足早に、帰宅する途中で在った。

美紗樹は、

「あつ

と竦んでしまった。

夜霞の中から、忽然とした黒い人影が、五つが現れたのだ。其の五匹の糞蠅どもの顔が、約一メートル近く目前に在った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

五匹の糞蝇どもは、ジツと美紗樹を見詰めている。

先ず、最初の男は眼光鋭くと云おうか、悪童相とでも云うべきなのか。まるで、獲物を狩る蝮つぼく冷酷なギラギラとした光を放つている眼、鼻筋が通つていて、薄い唇、夜叉面の様な其の表情は、如何にも襲いかかつて来そうな、どす黒い色に翳つていた。

二人目は、鬼瓦の様な顔に小牛の様な躯付きに、最新のモヒカン刈りのゴールドカラーに染め上げた髪型をしている。其の鬼瓦の様な顔の男は、両耳に無数のゴールド、シルバーカラーのピアスをしている。口には絶えず、紙たばこを噛み続けていた。

三人目は、のつそりのつそり、歩み寄り肩まで在るロングヘアに、顔は毛虫眉の下に血走つたぎょろ眼をはめ込んで、厳つくりらいだ鼻から下のぶ厚い大きな唇をし、口髭を蓄えている。肌の色は赤茶けた肌をし、髭を蓄えている。逞しい躯付きの百七十センチメートル半ばの男は、煙草を吸つている。銘柄はペルメール・スパークリングだ。ダークブラウンのカラーのカウレザー・スウェードのジャケットを身に纏つている。

次に、四人目は五人組の中で一番の高身長で恐らく、百九十センチメートル前後は在るだろうかまるで、フランケンシュタインの様な面長な顔に、スキンヘッドをした頭にはネイティブアメリカンの原住民の様な、Tattoo（刺青）を彫つている。血に飢えた

獸の様な、其の上に狂暴な獸が、獲物を狙い定めた光を放つてゐる細く切れ長な眼に、削げた頬骨、薄い唇をした表情を浮かべている男。

そして、最後の男が、此の五匹の糞蠅のリーダー格らしく、他を圧倒する様な全身黒付く目のトンチコートを纏つてゐる。其の顔蒼白、喜怒色に見られず、身長百八十一センチメートルの偉丈夫で、やや顎が逞しいが、鼻梁容貌には色合いの薄めのレイバンのサングラスをした男。此のが、手下の夜叉面の様な顔の男に目配せで指図して、

「待ちなあ。其処の姉ちゃん！」

と、云つて訊ね掛けて、俯きかげんに通り過ぎようとした其の時、猛獸か毒蛇かの様に舌舐めめずりする様な、不気味な声で美紗樹を、呼び止めて來た。

「えつ！」

思わず、美紗樹はグレイッシュュブロンズカラーのトートバッグの中に、護身用に何時も持ち歩いているベスタスタンガン（十五万ボルトのスタンガンでは最小最軽量。コート等の冬服の上からも瞬時に通電。サイズ：一七五×一八mm・重さ：一五〇g・安全スイッチ付き）VESTA V・四をグレイッシュュブロンズカラーのトートバッグの中に忍ばせている其れを、ギュッと握り締めた。

美紗樹が何故、此の様なグッズを、バッグに忍ばせて要るのか。実は此処最近、帰宅途中の女性ばかりが、相次いで拉致監禁、レイプ事件が多発していた事から、美紗樹はネットショッピングで購入していた。

「其の綺麗な艶つやの在る髪を振り乱しているやんけ。どないした、一体全体、何か在ったんか！？」

美紗樹が、

「……」

背後を素早く振り返って見ると

夜叉面の様な顔の男が、

「キィヒヒヒハイイイ。誰かに、追われているのか！？」

と、云つて美紗樹に訊たずねかけた。

ぎょろ眼顔の様な男が、

「何なら、俺たちがあくつていつてやるうか！？其れとも、俺たちと驛たすきに北で、楽しもつやるか！？」

下心見え々々の口調で、訊ね掛けて來た。

美紗樹は如何にも、危なそうな五匹の糞蠅ヒラタバエどもをジッヒ、

「……」

凝視している。

其れを、ぎょろ眼顔の男が、美紗樹に

「何んやつたら、俺たちが人通りの多い所へ、一緒について行つてやううか」

と、云つた具合に相手を油断させる様に訊ね掛ける。

少し、心持ち背伸びして、美紗樹の肩越しに暗闇を捲る様に、「あんたらに関係あらへんワア。急いでるんやから、其処をどいてやああ」

強い口調で、五匹の糞蠅ヒモヒ、棘ヒゲの在る言葉遣いで云い放つた。

鬼瓦の様な顔の男は美紗樹に、

「ヤナコッた、そんな簡単には通されへん」

半分おちやらけた感じと、残り半分は恐喝する様に訊ね掛けた。

フランケンシュタインの様な顔の男は、

「ヨオヨオ。氣取つてんじやねえぞう。姉ちゃんー。」

そう云つて、美紗樹を脅して怒声を浴びせた。

「……」

だが、美紗樹は其の怒声に対し、だいぶ余裕が出て来ると、もう余り怖くはないどばかり、

「やべ。止めてやあんたりー。アマ加減にせんと本気で怒るわよー。」

！」

せっぱつとした切り口上で決め付けた。

不気味な囁き声で、夜叉面の様な顔の男は、舌舐めずりし乍も、
不気味な囁き声で、夜叉面の様な顔の男は、舌舐めずりし乍も、
「キヒヒイイイイ。……エエで女、へええ 本気で怒つて呪れる
んけえ。じゃ、其の優しい愛の在る怒り方でさあー。俺たち愛に、
餓えてんねんやあ！……そんな、荒れんじさああ俺たちと楽しく
遣ろうぜえ。キヒヒヒイイイ」

美紗樹の眼線を追つ。

夜叉面の様な顔の男が、不気味な囁き声と共に、

「キヒヒヒイイイ。しかし、男ならば是非とも抱きてえ面を…
グヒヒヒ…」

其の他の四匹の糞蠅どもは、此の一弾ばかりか味を占めたのかグ
ループで、手頃な女性を餌食に凌辱強姦じょうじょきょうかん 所謂連續レイプで在る。
女性が恥辱の為に表沙汰を拒み泣き寝入りするを良い事に五匹の糞
蠅どもの所業は一段とエスカレートし、ついでに貴金属まで悪辣非
道を繰り返していた。

美紗樹は、直感した此の兇暴な男たちの行動はどんどんエスカレ
ートして行くのが目に表れて来た事に対して罵声を浴びせた。

「折角やけど、今夜は残業で早く帰りたい気分やから……」

五匹の糞蟻どもは其れ々々が、

（花はマン開だらうぜえ…おひ、そつやあ。に、臭いなら……美人に産まれたがふうん。い、嫌。ハッピーだらうなあ……）

（男なら、ぜつてえ諸ぶり付き、抱きたい美貌やなああ）

（キヒヒイイイイ…下の方は…あつちのすぼめた肛門アヌスがキュッと締まって形のいい菊花を最初は指を入れて、次に俺の片腕まで突っ込んで見てえ……）

（もうー。俺の「ワールドバットを、おめえの全ての穴にぶち込まねえと治まらねえ）

（此の女のアソコあまに、俺の極太の物を入れたらたまらねなあ……）

心の奥底に在る淫慾を、一人一人が心の中で思っていた。

美紗樹は心の中で、

（ああ。鬱陶しい早く帰らんと、近所のスーパーで、晩御飯を買いたいのにもー！）

半ば泣きが入る。

「そんな強がんないでさあ！ フフふううう……」

ぎょろ眼顔の男が、 刺の在る云い廻しで云つた。

少し苛立ち乍も、

「な、何よ、離してやあ」

美紗樹は云い放つた。

其の様子を見詰めていたフランケンシュタインの様な顔の男は行き成り、

「うるせえんだよ。此の女^{アマ}」

美紗樹に、近付いて腕を驚掴みにし様と、恫喝し乍右腕を伸ばした。

「やつ。ちよおつ、何すんー ひツ、止めてやあー」

「来いつ。おめえの様な^{あま}女^{アマ}は、俺たちが足腰立たねえ様にタップリ可愛がつて遣らア」

美紗樹は、グレイッシュブルonzカラ一のトートバッグの中から、

「……」

護身用のスタンガンを手早く抜き放つ。とても尋常では通れないと察したのか、並々ならぬ覚悟のほどが窺われる。

フランケンシュタインの様な顔の男は

「て、てめえ。舐めた真似してんじゃねえ」

更に、大声で怒声を浴びせて來た。

美紗樹と五匹の糞蠅どもとの間合いに、

「……」

異様なほどの空氣が漂つていた。

糞蠅のリーダー格の男が

「誰も。助けなんか来ねえ。おめえは俺たちと此の場を去るんやあ。用が在る、どないしてもおめえの軀に用が在るんやあ」

鬼瓦の様な顔の男の「ゴジゴジ」とた骨羽つた手を無造作に伸ばして來た。

「おいつ。女！」

美紗樹は、両手で身構えていたスタンガンが、立ち込める霧を切り裂き

「ええいつ」

と思い切つて、伸ばして來た手を払い除けられる。

鬼瓦の顔の様な男が、

「おいつ。大人しくした方が身の為やぞお」

美紗樹が手にしていた、其の頬みスタンガンはあつさりと、地面へ落ちて転がる。

「キヤーーーーあつ。離して、離してっ！！！」

手首を堅く掴まれて、美紗樹の軀が反り返った。鬼瓦の様な顔の男がジロリと睨み乍

「だ、誰が離すか、狙つた獲物は逃しゃしねえ。

此が俺たちの信条やあ。

おめえだけは殺しゃしねえ。永遠に可愛がつてやらあ、一日惚れをしちまたぜえ。今宵まで手名付けて来た女郎（【欲】女性を罵つて云う言葉。【対】野郎）どもには、嘗て見られねえ手応えがな、おめえなは在るんやあ。捜して来たかいが在つたつてもんよお、おめえの様な女をなああ

美紗樹を逃がさない様に押さえ付けていた。だが、美紗樹は其れを必死に逃れ様と、

「な 何を、云つてんのん。あんた。頭おかしいんとちやうつう

糞蠅どもは、強引に抱き竦められて、美紗樹が懸命に身をよじつて見せた。

「お水の女（水商売の女・ホステス「例」お水の花道）、出会い系サイトの女は人妻、淫乱人妻、若妻、塾妻、素人女、マニア・フェチの女、更にセレブ系の女、美人女子大生、美人女子高生、超美少女、O・、そしてアメリカ系、ヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系など、様々な女アマどもを物にして来た。

だが、どの女も皆、調教したが、まるで腰抜けアバズレ（【阿婆擦れ】）すれていってずうずうしく、品の悪い女性（注）だつた。

俺たちの姿を見ただけで、ちょっと声を掛けられただけで人形の様に成りやがつた。

其のクセ抱かれて溢れ漏れ出す有り様に、喘ぎ声が次第に漏れ出したり、自ら此処にいる俺たちのものにむしゃぶりついて腰を振りまくりやがる。

最初は、恐怖におののき続けていたのが其れを忘れやがつて調子を合わせていやがる。

そして……淫らな肉欲に忠実な奴隸嬢にする快感に溺れ死にする程に成つてゐる。だが、おめえはこうして何時までも抵抗し続けていやがる。其れが当たり前なんやああ。氣に入つたでえ、益々おめえを物にしたくなつて來たでえ。一いつぱつじやじや馬慣らしが、俺たちは大好きで楽しみつて云うヤシや。きっと、おめえはどびつきりのエエ情婦いふうに成るだろつよおお

糞蝶どものリーダー格の男は、そう云つて含み笑いを浮かべていた。夜叉面の様な顔の男が、美紗樹の顎を押さえ込み、美紗樹の美貌が仰向け成つた。伸し掛かる様に刃渡り三九・〇センチメートル在る超過激派タイプのサヴァイヴァル・ナイフを薄い唇と頬に近付けられた。

「キィヒヒイイイイ。俺たちがおめえを、頭の天辺から爪先までタップリと舐め回してヤラア。キィヒヒイイイイ……」

美紗樹は、夜叉面の様な男から逃れ様と手足をバタ付かせ

「キヤーーイヤー。離してやああつー汚い手で触らんといてやあ、は、離してつーーー」

押さえ付けられた美紗樹が、コンクリート塀を背にした。瘦せて

はいるが物凄い力で、ジーンと軀が痺れて来る。左右に顔を背けるのが精一杯だつた。

「其の可憐な唇、後で俺たちのアジトへ行つてからタップリと可愛がつて遣らああ」

美紗樹は、もう顔も動かせなく成つていた。顎の辺りを押していった手に、更に力が加えられてきた。

とうとう美紗樹が、

「キヤーーた、助けてーつ！だ 誰か！お、御願いつ！！」

悲鳴を上げていた。

「ヒヒヒイイイ！誰も助けなんか。来るもんか！！」

手下の四匹の糞蠅どもは、ちょっと背後を気にし乍、夜叉面の様な顔の男、フランケンシュタインの様な顔の男、鬼瓦の様な顔の男、ぎょろ眼顔の男たちは、時々背後を気にし乍も、再び糞蠅どもは代わる代わるぐうつと唇に指やサヴァイヴァル・ナイフなどを、近付けてきた。

美紗樹は、悔しさで一杯の気持ちだつた。柔らかに肥える朱唇には、流行りのナチュラルなグロス入りの口紅をし、朱唇が喘いでいる。リーダー格の男は美紗樹の唇に手で撫で廻していた。

「おめえ。流石に、いいセンスをしているぜえ。おめえは、俺たちの色に染めがいが在る女だ。フフン……！」

美紗樹は、もう一此以上、此の糞蠅どもの思い通りには成りたくない

は無いと

「うぐうー」

美紗樹は咄嗟に覺悟を決めた。美紗樹の一瞬の行動を見逃さずによ

一ヤリと、鬼瓦の様な顔の男が、

「おつと。其の顔に描て在るぜえー舌を噛み切らうとしたるが、
そんな事はさせないぜえーーー」

唇を歪めた。

「……」

刹那、其の右手が素早く美紗樹の顎を襲っていた。舌を噛む余裕
も与えぬ早さで在った。

「ああつ、やめてやあー」

美紗樹は悲鳴を上げる。

しかし、其の顔を

「うぐうー」

美紗樹が、掴まれた顔を懸命に拒んで振った。

すると、鬼瓦の様な顔の男は、

「ええいっ、」

大人しく出来ねえか、とばかり美紗樹の頬に食い込んだ指先に、唇が意志を無視して、鬼瓦の様な顔の男の思い通りに開くので在つた。

「此の女を殺してしまつては、俺たちの負けだからなあ

」

と、鬼瓦の様な顔の男が低く呟く。絶望と屈辱が美紗樹の心を押し潰すので在つた。もはや、鬼瓦の様な顔の男の思うが儘に成るばかりで在る。

「ふん、こいつすれば舌も噛めねえ」

五匹の糞蝇どもの双眸が嗜虐じめいへくの悦びに光らせていた。

糞蝇どものリーダー格の男が、

「ふふ、無駄な事やああ。おめえが、舌を噛ませるほど俺たちを甘く見るなよお。おいつ……」

やう云つて、ドスを利かせて凄んだ鬼瓦の様な顔の男に口配せをして指図をした。

鬼瓦の様な顔の男は、

「……」

其の指図に従つて頷き乍も、黒いゴムボールを美紗樹の鼻をつま

んで、思わず開いた口の中へ思い切り詰め込んで、痛みに耐えかねて美紗樹は激しく顔を振るうとする。

だが、鬼瓦の様な顔の男の指は顎を捉えて動かさない。

其の上から、赤いビニールテープで「ゴムボール」と、ギリギリと何重にも貼り付ければ、ちょっとやそっとではまず剥がれ落ちないビニールテープで口を塞ぎ、グイグイと圧迫すれば美紗樹の鼻から下顎半分を、ロングヘアの髪の毛ごと、一緒にギュッと強く締め付けられた。絶対に吐き出せない様に縛り巻き付けて、息苦しさで呻き声を洩らし乍も、鼻から懸命に呼吸をするのも一苦労で在った。

「うぐう、うううう！」

と喉の奥で鳴り続け、美紗樹の口にぴたり合致した、大きさに成っている。

口の中に溜まつた唾液が外に出さないばかりか、もはや口から唾液は完全に止められてしまった。ゴム製の独特の臭いが、咽の奥と鼻へ突き出てくる。怯え様としても涙腺へ作用を止めぬ刺戟で在った。余りにも化学製品的で、苦悶を楽しむ様に五匹の糞蠅どもが頬に嗤いを刻んだ粗暴者たちらしくない器用さで、鬼瓦の様な顔の男は美紗樹にビニールテープの猿轡を噛ませた。

其の上、両手首を後ろで交差させて、結束バンド（【Band together ; unite】アメリカ合衆国西海岸、東海岸両方の警察では、警官が犯人逮捕時に手錠を使用すると「えられているのが、一警官に、一つのみとされている為、犯罪者が、大量逮捕の場合は、使用される強化プラスチック製の手錠。百数十kgの力まで耐えられるのだ）が嵌められていて、完全に手は身動きが取れない状態に成っていたのだ。

「おめえは此で、舌を噛み切る事も出来へんじゃー！アジトへ帰つ

たら、おめえをタップリと俺たち全員で、弄んでやらああ……」「

リーダー格の男が、手下たちに目配せをすると、鬼瓦の様な顔の男がフォード・リンカーン・ナビゲーター 1100八年式 カラーリング・ブラック（装備内容・三バルブのSOHCコニットを搭載し、其の五・四ストライトン バハ 出力・110kW@5000rpm・最高出力・五〇・五kg-m@11750の最大トルクを発揮する。

七スピーカーの二十一inchホイール・ポリッシュユド・クロームのアルミ・イヤイヤサイズ・175/55R10・未だ人気が衰えないリンクバー。

シルエットはもとよりプレミアムSUVクラシカルで在りながらモダンな街中でも一際目立つ存在感）のサイドドアを開け広げて、美紗樹の躯全体を、ぎょろ眼の男、夜叉面の様な顔の男、フランケンシュタインの様な男と鬼瓦の様な顔の男の四匹の糞蠅どもに、抱き抱えて、フォード・リンカーン・ナビゲーターに無理やりに、乗せ込もうとしていた。

其の時、堺筋通りから、ボウツと車体の低そうな車の陰影が滲み出てヘッドライトのハイビームに光の中で、五匹の糞蠅どもに今にも、拉致られ掛けていた。

「おい。待ちなあ……！」

「だ、誰だつ、てめええつ！」

五匹の糞蠅どもが、眼をひん剥いて、声の主の方に、今にも吼え、噛み付くかの様に牙を研ぐ様に見据えていた。其の時、左側のドアが開いて、

「……」

人影が、車から降り立つて、ゆっくりと近付いて来る。

「何だつ、てめええつは、此の女は俺たちが眼を付けていたんやらなあ……！絶対^{せつて}に邪魔^{アマ}をさせねえ！！もし、邪魔しやがる奴アは、即刻ぶち殺してやるぜえ！！」

声の主が、悪辣な奴らを見て、

「ダセえ連中やなあー。もつとスマートな女性の誘い方が、在るやろうう！？」

五匹の糞蠅どもは、其の車の光で人影で顔までは解らないが、声の主の見据えていた。

「だから、何んタだ！？てめえはあああー！」

其の相手を、苛立たせる言葉には刺がある。

声の主の人影が、ハツキリと見えて

「ただのお節介な通行人。様子が、おかしかったから、ちょっと、覗いて見ただけや。人からは、よくお人好しで向こう見ずだと云われるけどなあ」

男は、ブラック・ホースレザーのジャケットを、身に纏つた身長が百八十九センチメートルは雄に在るだろう。ジツと、五匹の糞蠅どもに拉致され掛けている美紗樹を見据えて立ちはだかる。

五匹の糞蠅どものリーダー格の男が、其の男を、睨み付けて居た。

「チツ、アホが！！余計な真似しやガツテエ！！」

男は、不適な笑みを浮かべた。

「ふう……」

手下の一人、フランケンシュタインの様な顔の男が、

「サツサと失せろ。もたもたと、して居やがるとぶつ殺すぞ。てめええ！」

罵声を浴びせた。

五匹の糞蠅どもは、美紗樹をレイプ目的として、男を睨み付け乍、

「ああん？んー？なんだあてめえはー？」

「何んかあんのか」「ハーー。」

「よおよお。兄ちゃんよおーー。カツ「付けて」と、てめえから、ふち殺すぞーー。此の呆けーー。」

「き、聞いてんのかああーー?ああ?」

其の言葉に対してもは、糞蠅どもを、
「糞がつてんじやねえよ糞餓鬼どもが...」

鋭い眼付で、ドスの利いた口調で云つた。

五匹の糞蠅どもは、男の一言で、呻く様に云つた。

「なあにイーーーーー。」

「俺たちに云つていやがるのけえーーーー。」

「うるせえーーー生意気に突つ張りやがつて。ぶつ殺すぞ此の野郎
がーーーー。」

「な、何。遣つてんだああおめえらあーー。其のべっぴん(【別嬪】)
関西では、美しい人、美人、美女、美少女などを表す名称で在る)
に、手を出すんじやねえーーー。」

「ああーーー?な、何云つてやがんだあ。此奴ーーー。」

「てめえ。頭、おかしいんとちやうかあーー?ああんーー?」

「おめえらあ。もし、彼女を遣るつて云つなら、俺が相手に成つて遣るぜえー！」

五匹の糞蠅どもは、

「フン…おもしれえ…いいだろつ…御前らー！」

「オウーー！」

「クククウウ…

「キヒヒヒヒ…よおよお、野郎をハツ裂きにじてやがれー！」

「アホが、なめてんじゃねえー！」

フォード・リンカーン・ナビゲーターの中から鉄パイプや金属バットを取り出し、其れ々々が手に取り身構えた。

男は、せせらり強こを洩らし、

「フン…馬鹿が…そいつあーーいつちのセリフだ！生きて帰れると思つたら大間違いやあーー！」

ドスを利かせた口調で、鋭い眼差しで、五匹の糞蠅どもを睨み付けた。

其れを、聞きいていた五匹の糞蠅のリーダー格の男は手下に、

「かまついたーねえー！此のビアホをやつちまーなあーー！」

命令すると、手下の四匹の糞蠅どもは、一斉に大声を

「『おおおおお！－－』」

張り上げて、其れ々々が、得物を振り廻し乍、男を囮掛けて、攻撃を開始した。

「いけえ！……」

「「おおりやああ－－！」

「野郎をぶち殺せえ－－！」

「生かしちゃおかねえ！」

だが、男は、次々に敵の攻撃を見極め乍、交わして行く。先ずは、鬼瓦の様な顔の男が、金属バットで、男の背後から頭、目掛けて振り下ろしてきたが、彼は素早く其の奴の軸足の膝頭の上から左ロー キックを放つ。透かさず、責め手の彼は、此の反撃の左ロー キックで、戦いの主導権を握る事が出来るのだ。

直ぐに、蹴り足を引き戻せる様にコンパクトに蹴る事が大切で、男は、左の蹴り足を戻して体勢を立て直し乍も、やや間合いを詰めて、鬼瓦の様な顔の男の前足へ右ロー キックを放ち、躯のバランスを崩さない様に気を付け乍も、強く鋭い蹴りを繰り出した。次の瞬間に、鬼瓦の様な顔の男は、両膝を地面に跪いて俯せに倒れ込んだ。

其の次に、男の一一番左側の鉄パイプを握りしめた、ぎょろ眼顔の

男が勢い良く、袈裟掛けに振り下ろしてきたが、彼は、前に踏み込んで下から鉄パイプの柄頭つかがしらを、躯全体ですくい上げ、（此の時、腕力は使わない）柄中つかなかを取つて！半身はんみに躯（たい）を引くと！（孤こを描いてはいけない。最短距離の直線）地面を摺り足で、引き戻す。其の動きは流れる様な一拍子で行つ。

其の時、ぎょろ眼顔の男の躯は空転して、道路に備え付けられている大阪市営のゴミ箱に躯事、物凄い音を鳴り響かせ乍、叩き付けられたぎょろ眼顔の男は地面につつぶしていた。呻き声を洩らしている。

「ふはつあ……！」

「ゴミ箱にぶち当たり、辺り一面にゴミが散らばつて居る其の中に、ぎょろ眼顔の男は白眼を剥いて仰向けに倒れた。

男は、

「フン…。話しにならねえなあ……！」

五匹の糞蝇どもは一瞬、躯がまるで、金縛りにでも在つた様に、動けなくなつて彼を見ている。

直ぐ様、リーダー格の男は我に返つて、

「く、糞つたのが…………！」

其の時、男の躯に弾みを付けてグルリと、一回転。

三人目のフランケンシュタインの様な顔の男が、物凄い形相で攻め込んできたが、男は其の動きを見切り乍も、フランケンシュタイ

ンの顔の男の胸から首の辺りを、掬い上げる様に蹴り飛ばした。ランケンショタインの様な顔の男は、嗚咽した。

「がは…ゲホ…」

「フン…話しこもなりやしねえなあ…」

「さ、佐伯つ…糞お」

「や、野郎つ…今度は、佐伯までもが…！」

「て、てめええ…！」

リーダー格の男は、

「ち、散れ…散れ…！」

と、云つて喚き散らす。

其の男の攻撃に、残り一匹の糞蠅どもは驚き乍も、得物を身構えて道修町筋に皆、飛び下がつた。

男は、残りの一匹の糞蠅どもを見据え乍も、何時如何なる時でも、攻撃態勢を崩さずについた。

先の三匹の糞蠅を薙ぎ斃した時に、夜叉面の様な男は二十三センチメートルは在るだろうか、両先端に刃渡り三九・〇センチメートルの長い棒を持つて身構えた。

そして、リーダー格の男はやつと構えを立て直して、白い眼を剥

き出し、じりじりと男に、サバイバル・ナイフの一刃流の刃を詰め寄らせて、残り一匹の糞蠅は其れ々々が、激怒に歯を剥いて、

「植田つ。野郎に、此処まで遣られ放しじや許されねえ……」

「おおおつ。松永さん……当たり前やあ……野郎を絶対ぶち殺せえねえ限り、遣られた勝呂、佐伯、矢田の仇を討つたなきや。俺たちの気が、治まねえ……あの女が手に入らねえ……」

リーダーの松永と夜叉面の様な顔の植田は、此の謎の男を殺さないと腹の虫が治まらないと、追い詰められる側にされた一匹の糞蠅は、

「う、植田。いいか、一斉攻撃で野郎を殺るぞおお……」

「おおお。松永さん……！」

一匹の糞蠅たちは、口々に仲間を遣られた分を、倍にして殺ると復讐を誓い合つた。

「き、貴様は何んやねん……何者やあ……！」

其の男は応えなかつた。

植田は、全身をフルに使って、長刀を振り廻し乍、男を攻め捲る様に激闘が始まつた。

其の男は、植田との攻防戦が、連続の中。松永も加わり更に一対一の戦いに変わつた。

男は、一匹の糞蟻の攻めを、見極め乍鉄パイプを拾い上げて、植田の長刀の攻めを鉄パイプで、交わし乍も、攻めに転じる。

次の瞬間、其の男は、先ず植田の左ローキックを右足でカットし、反撃に移行しやすい様に、右膝を「ティフェンス（膝ブロック）」して、植田の軸足に成っていた右足へ、男が右ローキックを放つ、此の反撃の右ローキックで、戦いの主導権を握る事が出来る。

直ぐに蹴り足を引き戻せる様にコンパクトに蹴る事が大切、男の右の蹴り足を戻して体勢を立て直し乍、やや間合いを詰め、植田の前足へ左ローキックを放ち。躯のバランスを崩さない様に気をつけ乍、強く鋭い蹴りを繰り出して、素早く戻し乍も、植田が前に出て来るのに合わせて、其の男は右足でストップピングのフロントキックを繰り出す。

植田の繰り出す長刀を素早く交わす男の身の軽さには、微塵の隙も見せない。遠の植田も、

「うおおー……」

と雄叫びを上げて、焦れば焦るほど攻め入る隙は寸分も見当たらぬ。男は総合格闘技と米国海軍特殊部隊の訓練を積んだ高い身体能力を駆使して、鍛え上げて居る。

植田が、長刀の（長刀の動きが不完全の場合は長刀を使う事で突きのタイミングや軌道をのズレやブレが拡大される為、動作の細かな微調整をする）連続的な攻撃を繰り出して、肘を曲げないで（肘の動きで誤魔化さない事で、躯全体で長刀をコントロールする事が出来る）腰を廻し乍、（腰と云つてもウエスト部分を廻す。躯を廻してしまつと膝が内側に入つてしまい痛めるので注意する）真つ直ぐ突き出し（長刀は躯の正面を真つ直ぐ往復する。左右に

（腰を廻す）其れを、男を的に突き出した。

植田は、長刀を上段から頭を割にいく様に、長刀を振り下ろしてきたのを、男は鉄パイプの接触点を崩し、鉄パイプは前手を視点として、ただ思いつきり打ち付けるだけで意味がない。

掌の力を調節して、当たったところから更に伸ばす様にして遣る事で、其の男の力とぶつからずに植田を崩す事が出来き、更に後ろの手を視点に変える事で植田は力の出所が分からなくなり対処できず、崩れる事に成った。

其の男は、鉄パイプを下から滑らかに切り上げて、植田の長刀の真ん中を、叩き落として真っ二つに割り鉄が木の棒の部分はへし折れる凄い物音を発していた。

植田は、長刀を持ち替えて刃先を上にしての攻撃に転じて男の顔と上半身へ攻め込んで来たが、植田と向かい合い左手で狙いを付けておき、左手で植田に触れ右パンチを植田の死角と成る下から打ち出し、右足を伸ばし乍右パンチで打ち、足の力で打つ事で強力な打ち拳と成り、更にフェイントもなしに、一気に両腕を縦横無尽に動かし、拳を胸の前で回転させ乍、必殺拳の攻め技を駆使する。仰け反る植田に、更にストレートパンチの連打乱れ打ちを、ブチ込んで行く。

植田は、二つに折れた長刀で、男の動きを左右に振り乍、払いのけ様とするが、其の男の連続攻撃には歯が立たない。

其の男は、ローキックを右膝への集中攻撃を見舞い乍の植田の脚の感覚が麻痺した。

次の瞬間、植田の襟首を掴み取り、地面へ引き倒して、男は植田を膝十字固め（膝十時固めは、ひとことで云うと腕ひしぎ逆十時

固めを足に掛けた技で在る)にして、グランドポジション(仰向の敵に対して、攻撃が敵の体側から半身で覆い被さる)から男が上に成り、植田がハーフガードポジションを取つた。

其の男は、植田の左膝を右手で押し付け乍、体勢を移行させて、男は躯を左回転させて、植田の左足を抱える様にし乍しゃがみ込み、此の一連の動きは、ハーフガードポジションを崩す為の一つのテクニックで在り、男は植田の左太腿を両足でロツクし、自分の腰を植田の左太腿に押し付け乍、左足を真つ直ぐ伸ばせる様に、其の男は両腕と両足で上手く植田の左足をコントロールし、男が植田の左足首を双手で抱え、上体を寝かし、植田の左膝と自分の下腹部とが密着する形に成り、其の儘腰を前に突き出し、男が背中を反る様にすると、より技が決めていた。

植田の膝は完全に膝十時固めが決まり、左膝は鈍い音を立てて折れていた。

「ぐあ、つ！」

植田は、悲鳴を上げて白眼を剥いている。

其れを、見ていた松永は二刀流のサヴァイヴァル・ナイフを身構えていた。男が、植田の躯から離れる前に背後から忍び寄り、刺殺そうと近付き、サヴァイヴァル・ナイフを振り下ろした。

「や、野郎お——死にやがれえ——！」

素早く其の男は、見切り乍も身構えた。

松永のサヴァイヴァル・ナイフの二刀流による縦横無尽な連続技

が、応酬をして来たが、其れを男はまるで、清涼水の様に流れに、逆らわず流れに乗り乍も、松永のサヴァアイヴァル・ナイフの攻撃を見切り、自らの間合いの中で交わして、男はオープン・カフェバーの店に在る椅子を振り廻し使い乍も、交戦して松永の両腕からサヴァアイヴァル・ナイフを叩き落とした。

男は、松永の顎を^{しゃうつい}目掛けて右ストレートを繰り出す。

此の攻撃は、次の掌底^{しょうてい}（掌底とは、手の平の親指と小指の付け根付近の肉厚部を指し、転じて其の部分を使って打つ技術を云う。一般にパンチと云えば拳で人を打つと云う行為は意外に困難で在る。何故なら、拳を握る際、腕や肩に無駄な力が入りやすく、其の結果パンチのスピードが鈍り、命中度も低く成る事がが多いからである。更に素手で打つ事を考えた場合、拳を痛めやすいおという欠点も持つ。

対して掌底は、手を握らない為、無駄な力も加わりにくく、素早く打つ事が出来る。

勿論柔らかい部分で打つ為、怪我の心配もない。

又、グローブを装着せず、素手で打ち合つという事を考へるならば、掌底は一般的なパンチに勝りこそすれ劣らない有効な攻撃だと云える。

『面』的な衝撃力を持つ技。一言で云つて、拳で打つパンチは『点』の攻撃と云える。対して掌底は『面』の攻撃で在り、点の攻撃は内面よりも表面に損傷を与えやすい。しかし面的な攻撃は表皮よりも内面への衝撃力が大きい。顔面やボディへ攻撃について考えた時、脳や内臓に与える衝撃力では、拳によるパンチより掌底の方が大きいと云つても間違いではないだろう。【Point 腕の振り幅を小さく】掌底の最大のPointは、腕の振り幅を小さくする事に在る。あくまでも、掌底はビンタとは異なる技術だと云う事を忘れてはならない。脇を絞り最短の軌跡で敵の顎を打つ。此はストレートで打つ場合もフックで打つ場合も共通する原則で在る）に繋が

る為の、リードパンチ（ジャブ）と成り、男による左の掌底フックし、左腕を外側から小さな振り幅で、松永の頸に的確にパンチを当てる、腕の振りが小さいとどうしても威力が半減してしまうが、右半身に成るまで腰をしつかり振り切る事で、其のデメリットを克服され、男が右の掌底フックを放ち、攻撃箇所はさつきと同じ、松永の頸へ右ストレートを繰り出して、次の掌底に繋がりのリードパンチの連續動作によつて自然に間合いは詰まるが、掌底で在れば、松永との距離が近くても攻撃しやすく、男による左の掌底アッパーを松永の脳を大きく揺さぶる様にアッパー（アッパーの場合、敵の喉から頸の辺りを突き上げるつもり打つと掌底が頸に掛かりやすい）を放つた。

此の時、松永の頭の中の脳は、のうしんとう脳震盪を起こしていた。余りの衝撃波で脳の中は可成り揺れていた。

其の男と松永に正対した状態から松永の首をロックして喉仏に強烈な圧迫を加える絞め技をする。

其の為、松永の体勢が低くし乍、此の技を決める事は困難で在り、決める事は困難で在り、（敵の首をがつちりと絞りする時、抱え込む手の拳を強く握る。

更に、拳を右に回転させ乍手首を返し、敵の喉仏を下から突き上げる様にして圧迫する事が大切で在る。と、同時に攻撃側は、己の腰を前に突き出し、背中を後方に反らせる様にして、敵の上体を浮かす。こうする事で、自然と喉仏への圧迫は強まり、敵の動きは完全に停止する）がつちりと絞り上げ、抱え込む手の拳を強く握る。

更に、拳を右に回転させ乍手首を返し、松永の喉仏を下から突き上げる様にして圧迫する事で、同時に攻撃側は、己の腰を前に突き出し、背中を後方に反らせる様にして、松永の上体を浮かし、こうする事で、自然と喉仏への圧迫は強まる。

松永の動きは完全に停止させて、次の攻撃へのタイミングを想定し乍も、男は段取りよくテンポアップして更に松永への攻撃を緩めずに、男は松永を背負い投げで地面に叩きつけて、ツイストアームバーの技へ移り変わり、仰向けに成った松永に対して、男が袈裟固めを決めた。

次の攻撃動作に繋げる為に、其の男は自分の右足の付け根に松永の右腕の付け根を引き寄せ、しっかりと密着させ、自分の右膝を胸を引き付ける様にして、松永の右の二の腕を右足の付け根辺りで挟み、此の時、右腕で松永の頭部を決める事により、松永の右の肩関節を完全にロックし、体勢を作つてから、其の男は左足を松永の右手首に引っ掛ける様にして乗せた。

此の時、松永の手の平を下に向け、男が右足を伸ばし、松永の右手首を下へと沈ませた。其の男は、松永の右肩や右の二の腕を、しつかりと固定させて、自分の左足のみを動かした。其れだけで、松永に大きなダメージを与えたのだ。

其の瞬間、

「ぐあ……」

松永は、悲鳴を上げると其の儘、白眼を剥いて口からは嘔吐物と血の混じつた唾液を、垂れ流し出て失神をした。

男は、絞めていた両足で腕を絞つて肘関節を解き放した。

此で、五匹の糞蠅ども全てを、叩きのめし終えた男は、

「確かに、てめえの肉体は頑丈でサヴィヴィアルナイフのテクニツボディ」

クはたいしたものだつたぜえ。だからこそ、今まで、其れを櫛にして、勝つて来れたんだろうが、此からは、氣を付けるんだな……だが、てめえら、まだ……遣り合つと云つなら……徹底的に叩きのめすだけやあ……そん時は、死ぬ氣で来いやああ……」

男は、松永や手下の糞蝇どもに、そう云つと手下の四匹の糞蝇どもが、ズタボロの躯を引きずり乍も、松永に近付いて矢田と佐伯の二人が、松永の両肩に腕を廻して立たせた。

「い、嫌つ。もう一参つた！」

そう云つすると、遠くでパトカーのサイレンのけたたましい音を鳴らし乍、谷町筋の大阪府警本部の方から聞こえて來た。

『ファ オン ファ オン ファ オン … ファ オン ファ オン …』

「わ… 警察やああ…！」

パトカーのサイレンの音を聞いて直ぐ様、勝呂が喚き散らした。

「ヤベえ！…」逃げるぞお！…」

今度は、佐伯も大声で喚いて、逃げる算段をし始めた。

「お、おいっ。撤収だ！… 撤収！…！」

植田が、フォード・リンクカーン・ナビゲーターがドライバーズ・チェアに乗り込んで、イグニッショングリーン・キーを捻ると、ハエンジンは目覚め、

『ドードードオオオオオオ』

爆音を響かせた。五匹の糞蝇どもは、フォード・リンカーン・ナビゲーターに乗り込んで、道修町通りから堺筋線へ一目散に逃げ出して北方向へ行つた。

三

激闘を制して堺筋の道修町通りの四差路から男は、ゆっくりと美紗樹の倒れている所へ歩み寄つて、腰を屈めて

「……」

其れから後ろ手に、嵌められているプラスチック製の結束バンドを愛車フォードGTのキー・ホールダー付のユーティリキー。

ユーティリキーとは、刀付きの鍵型ツールで、隠し武器に用いるアメリカ製品で在り、又の名をキーナイフとも云われて発売されている。

其のユーティリキーのキーボードから手にして、プラスチック製結束バンドを切断してフォードGTのトランクの中からファーストエンド（救急箱）を持ち出して來ていた其のバックの中から消毒剤や絆創膏などを取り出して、擦り傷、切り傷の応急処置を施して遣る。

り、其の当の本人の美紗樹は、まだ氣を失つた儘だった。

其の男は、手当てを終えると美紗樹を、両腕で抱き抱え込んだ。所謂、御姫様抱っことい、う奴をして、愛車フォードGTの助手席に、そつと乗せ換え寝かせた。

美紗樹にそつと、近付いて見ると軽い寝息を、

「スウスウウウ……」

と、立てて居たのを男は、其の寝顔をのぞき込んで、

「おい。君イ……」

と、声掛けを試みて三度田に声をかけた時、美紗樹は眼を覚まし、直ぐ側に人の姿を見てハツとして、起き上がるとするのを、

「あつ、危ない。頭をぶつけるぜえ！！」

と、男は声を掛けた。

美紗樹は、其の声に一瞬、

「……」

ドッキと反応して、其れから声のした方に首をゆつくつと向きを変えて見ると、声の主の姿をもう一度見直した。

外は一面の星月夜で在った。

（めつちや、べっぴんやなあ……）

月明かりに滲む様な美紗樹の横顔を見て、そして興味を示さなかつた其の男だが、美紗樹の顔を覗き込んでそう思った。

べっぴんと云つても、人に与える感じは其れ々々異なる。べっぴんとしても嫌悪感を与える者もいるし、べっぴんでなくとも心を温めて笑れる者もいる。美紗樹は其の点、心の優しさが其の顔を見ただけで感じられるのだ。

「気がついたか……」

男が、声を掛けると、美紗樹はハツとして、

「……あ、あんたは誰やのん！？」

恐怖に震える声で叫んだ。

「君を、あの糞蝇みたいな連中から、助け出したお節介な男と覚えて呉れればエエでえ……」

男は、そう云つと

「た 助け出した？私を、家に帰して下さい。でも、の人たちがまた、戻つてきたらと思つと……」

美紗樹は、まだ頭の中が混乱をしていて、此の男の云つてゐる事が理解出来なかつた。

暫くして、美紗樹はさつきまでの事を思い出して、恐怖した事が走馬灯の様に蘇つてきて軀を震わせて、ショックのあまり自然と泪

が溢れ出していた。

其の男は、美紗樹の不安げな顔を見詰め乍も、

「い、家に、帰りたいのは解る。だが、今は奴らがまだ何処かに潜んでいるか解らへん。どうだろ、今夜は安全な場所へ移動しないか……」

そう云い乍、ライダージャケットの内ポケットからバンダナを取り出して美沙樹に手渡した。

美紗樹は、バンダナを受け取つて

「あ、有難う……」

と、応えてから其のバンダナで、

「……」

頬を伝う泪を拭い始めた。

其れを見て、男はC○○○に囁つて

「俺が、信じられないのならしゃないなあ……」

美紗樹の顔を見詰め乍、訊ね掛けた。

美紗樹は、月の光で男の顔を見詰めていたが、其の男が欲だけで動いている人間ではないのが解ったとみえて、

「解つたわあ。それじゃ、そないするわねえ……でも、もしも、
私に変なん事したら舌を噛むから、……」

と、云つてジッと見詰め乍、此の男が自分を護つて呉れる人間なのか、其れとも邪悪に満ちた人間なのかを見極め様と観察する。

男は、其の訊ね掛けに一拳手一投足

「うん。約束しよう。其れで君の名はなんて云うねん」

美紗樹の顔をシッカリと見詰め直して、応えた。

今度は、逆に祥次から美紗樹に訊ね掛けると、

「其れは言えへんわあ。貴方も云いたくは在らへんと思いますか
ら……」

そう問い合わせに応えた。

「俺はどんな所でも自分の名前を隠す様な生き方はしていいひん。
鷹村仁^{たかむらじん}、生まれついての天涯孤独の男だ。独生独死独來獨去
、
氣ままに遣つている男だ」

男は自らの姓名などを包み隠さずに応えた。

美紗樹は、最初に鷹村の事を本当に信用の出来る人間なのか！？
半信半疑だつた。だが、今、眼の前に佇む此の男が偽りの無い男にも思えるが、まだ、半分は疑心暗鬼で居たが、

「家族や親類は……」

真顔を見詰め乍も、訊ね掛けた。

「名も知らねえ。ただ、親父が警官で在つたと知つて警察学校を出て、刑事のいはを学んだが、世間の裏側を見てしまつてからは刑事を辞めて、渡米をしてグリーンカード得る為に頑張つて、手に入れてから海兵隊になり、更に上を目指してシールズ=特殊部隊として様々な事を得るものと、なくした者も在つた」

鷹村は、自らの素性を明らかにした。

「じゃあ、今は何をしているのー?」

「今の俺は、【此の世の塵芥、何でも始末を致します】とい、う所謂。『始末屋』とい、う稼業をして、錢を稼ぐ暮らしをしている」

「『始末屋』つて、何んかTVドラマの『必殺仕事人』の中村主水みたいやねえ……」

「も、主水。見たいつて、其れを云うなら、『仕掛人』の藤枝梅安の様な、イケメンて、云つて貰れるか!」

「ふ、藤枝梅安てえ……だ、誰其れ!? 誰の事!? 私、知らへんわあ……でも、まあ。顔の方はエエけど……! ? ふふふ……」

「へつ! ? ふ、藤枝梅安を知らへんか? ? はあ……。まあ。あつて! ? でも、やつと睡つたなあ……。もう、其の笑顔が出れば安心やあ……」

「えつ。うん！知らへんワア！……あつ。私の名前は……同馬美沙
樹きて云うんねんよお」

鷹村は、思わず云い掛けた言葉を呑み込んで、

「……」

愛車のフォードGTのドライビングを、始め様としてイグニシシヨン・キーを捻ると、重低音のエンジンサウンドを響かせた。

此のフォードGTは、外観のブルー＆ホワイトのストライプ・ツートンカラーリングの一九七一年式改変 カスタム・ヴァージョンで、乗車定員：二名、ボディタイプ：二ドアクーペ、エンジン：五・四L V8 DOHCスーパーチャージャー 五五〇PS／六九・〇kgm、変速機六速MT、駆動方式：MR、全長・四・六四三mm、全幅：一・九五三mm、全高：一・一五mm、ホイルベース：二・七一mm、車両重量：一・五六八kg、ステアリング位置：左、タイヤ：ミシュラン二九／六五・一八【フロント】、ミシュラン三一／七一・一八【リア】、更に、チューニングして、最高出力を七〇〇hpまで引き上げられている。

鷹村は、六速MTのミッションをセカンドからサード、トップへと変更させ加速させて、其のの儘十七インチホイルのミシュランタイヤの音を軋ませ乍、道修町三の交差点を左折して御堂筋の全車線の道路は走る車は少なく、業務系トラック、タクシー位が走る程度、ガラガラに透いてい（空いているなどを差す事）た。

鷹村は時々、美紗樹の顔を横目で確認し乍も、愛車フォードGTを運転し、久太郎町三の交差点を右折して、中央大通り抜け川

口三交差点を其の儘突つ切る様に港区方面へ向けて走り去った。

美紗樹は、鷹村がアメリカから

「た、鷹村さんてつ！どないして、渡米をしたん！？……そ、其の……ぐ、軍隊なんかに入隊しはつたんですか！？其れに、アメリカに永住を決めたにしても、グリーンカードを取得したんでしょ。また、どないしてわざわざ、日本へ帰つて来はつたんですか！？」

何故、日本に舞い戻つて来たのかが知りたくて謎と何処となく陰の在る部分を聞いてみたいと思っていた。

鷹村は、美紗樹の好奇心旺盛で在り美麗さに、普段は誰にも話した事が無い事までも、彼女の魅力に

「本当ほんまは、此の日本には一度と戻らないと誓つていたが、或事件をキッカケに舞い戻つた……」

其の事を応えた。

美紗樹は、再び鷹村の横顔を見詰め乍

「えつ！？」

一瞬、其の応えに対して、驚愕していた。

鷹村の横顔には、

「……」

何故か悲しみの陰を落とす様な、 眼差しを称えていた。

「……」

美紗樹は、其の鷹村の横顔を見ていて、其れから暫くは、何も云えなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5634f/>

禿 鷹

2010年10月28日04時42分発行